

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 芥川龍之介の漢詩世界

doi:10.29714/TKJJ.200106.0004

淡江日本論叢, (10), 2001

作者/Author：彭春陽

頁數/Page：75-84

出版日期/Publication Date：2001/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200106.0004>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



はじめに

芥川龍之介と漢詩との関係について、ほとんど論じられていないのが現状である。芥川文学の研究が盛んな今日において、この現象はいささか不思議に思われる。山數和男は、これは「漢文の読解力の急速なおとろえのため、自由に漢籍が読める人がへった」(注1)ためだと指摘される。これを理由の一つとして挙げられるのが頷けるが、主な理由ではないと私は思う。

芥川が創った漢詩の中で、公に公表した作品は一首もなかった。現存の資料によれば、書簡にしか見ることができない。つまり、芥川にとっては、漢詩は単なる余技であり、本職ではないことがわかる。このように、正式な発表がなかったことと、芥川が遊び半分でしか漢詩を書かなかったことこそ、芥川の創った漢詩が今までのように無視されてきたもっとも重要な理由ではないかと思われる。

ほとんど先行論文がないという空白の状況で、拙論では芥川の書いた漢詩を通して、その創作動機とか、彼の漢詩の趣向などをまとめてみることにする。

一、芥川龍之介の漢詩文の世界への開眼

芥川は『追憶』の「学問」の項に、「僕は小学校へはひつた時から、この『お師匠さん』の一人息子に英語と漢文と習字とを習った」(注2)と書き、漢文との出会いを明記した。ここでの「お師匠さん」の一人息子とは、芥川家の一中節の師匠だった宇治紫山の息子、大野勘一のことである。これはおよそ芥川の漢文勉強の嚆矢であると見られるが、芥川本人はこの学習についてさほど評価しなかった。それにしても、芥川の漢詩文の世界への開眼という点から見れば、重要な意味を持っているのである。

「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」(1919年1月1日『新潮』第30巻第1号)で、芥川は「中学時代には、泉鏡花のものに没頭し、それを悉く読んだ。漢詩も可成り読んだ」と書いている。この時期の漢詩勉強の成果の冰山一角として、中学校時代の恩師である広瀬雄にしたための手簡(明治43年7月3日)から覗かれる。

今日朝来微雨独座して許丁卯の詩集を繙く一味の暗愁の霧の如く人に迫るを感じ候

殊に其懷古七律の如き格調痛哀李義山に比すれば更に微、温飛郷^(マ)に比すれば更に麗、
青蓮少陵以降の七律を以て斗南第一人の名ありしもの誠に偶然ならず候

この頃の芥川の漢詩の勉強は単なる詩を解説するに留まらず、他の詩人と比較し、評論まで書ける域に達しているのである。それから、誰でも知っている詩人のことをわざわざ本名を避け、字や号で呼ぶということは、例えば李白のことを青蓮、杜甫のことを少陵と呼ぶなど、恩師に自分の博学を誇示しようとするからであろう。但し一つ気になるのは、「温飛郷」を「温飛郷」と間違えたのは、単純の筆誤りなのであろうか。

漢詩の学習はただ読んで鑑賞するだけでなく、先生に漢詩そのものをも作らされたい。少々長くなるが、『野人生計事』の「一、清閑」の冒頭を引用させてもらう。

らんざんたいりばうろをむすび 「乱山堆裡結茅廬」 とふなかれやじんせいけいのこと 莫問野人生計事	すでにこうじんとともにあとやうやくそなり 已共紅塵跡漸疎 さうぜんのりうすぬちんぜんのしよ 窓前流水枕前書」
---	---

とは少時漢詩なるものを作らせられた時度たびお手本の役をつとめた李九齡の七絶である。今は子供心に感心したほど、名詩とも何とも思つてゐない。乱山堆裡に茅廬を結んでゐても、恩給証書に貯金の通帳位は持つてゐたのだらうと思つてゐる。

しかし兎に角李九齡は窓前の流水と枕前の書とに悠悠たる清閑を領してゐる。その点は甚だ羨ましい。僕などは売文に糊口する為に年中匆忙たる思ひをしてゐる。ゆうべも二時頃まで原稿を書き、やつと床へはひつたと思つたら、今度は電報に叩き起された。社命、僕にサンデー毎日の随筆を書けと云ふ電報である。

随筆は清閑の所産である。(略)。(注3)

これで芥川が漢詩を作られたことがわかる。で、なぜこの随筆の題を「野人生計事」にしたのか、私は次のように推理する。『サンデー毎日』に随筆を依頼された芥川は、小説の原稿を書くのに忙しい毎日を送っている自分には、随筆を書くほどの清閑がないと言おうところ、学生時代、漢詩の手本としての李九齡の「窓前流水枕前書」という清閑の意を表

す句を思いつき、結局、この随筆のタイトルをその前の句の「莫問野人生計事」の「野人生計事」にしたのであろう。習作の手本がこれほど記憶に焼きついたのである。

こうして、芥川は漢詩の鑑賞から、創作に入ったわけである。

二、芥川の創った漢詩

『芥川龍之介全集』（1997年岩波書店出版）の「第17巻 書簡Ⅰ」から「第20巻 書簡Ⅳ」までの手紙によれば、芥川の創った漢詩を年代順に並べると次の通りである。便宜上五期に分ける。

初期（1912年1月～1913年12月）四首

- (1) 春寒未開早梅枝 幽竹蕭々垂小池
新歳不來書幄下 焚香謝客推敲詩
(明治45年1月1日 山本喜譽司宛)

- (2) 春寒未発早梅枝 幽竹蕭々匝小池
新歳不來書幌下 焚香謝客独敲詩
(明治45年1月1日 井上恭宛)

- (3) 簷戸蕭々修竹遮 寒梅斜隔碧窗紗
幽興一夜書帷下 静読陶詩落燭花
(大正元年12月30日 小野八重三郎宛)

- (4) 寒更無客一燈明 石鼎火紅茶靄輕
月到紙窗梅影上 陶詩読罷道心清
(大正2年12月9日 浅野三千三宛)

二期（1915年6月～1915年12月）

- (5) 放情凭檻望 処々柳条新
千里洞庭水 茫々無限春
(大正4年6月29日 井川恭宛)

波根村路

- (6) 倦馬貧村路 冷煙七八家
伶俚孤客意 愁見木綿花

(大正4年8月23日 井川恭宛)

真山覽古

- (7) 山北山更寂 山南山空迴
寥々殘碇散 細雨灑寒梅

(大正4年8月23日 井川恭宛)

松江秋夕

- (8) 冷巷人稀暮月明 秋風蕭索滿空城
關山唯有寒砧急 擣破思鄉万里情

(大正4年8月23日 井川恭宛)

蓮

- (9) 愁心尽日細々雨 橋北橋南楊柳多
櫂女不知行客淚 哀吟一曲采蓮歌

(大正4年8月23日 井川恭宛)

- (10) 冷巷人稀暮月明 秋風蕭索滿空城
關山唯有寒砧急 擣破思鄉万里情

(大正4年8月24日 石田幹之助宛)

- (11) 黃河曲裡暮烟迷 白馬津辺夜月低
一夜春風吹客恨 愁聽水上子規啼

(大正4年9月21日 井川恭宛)

- (12) 閑情飲酒不知愁 世事拋來無所求
笑見東籬黃菊發 一生心事淡於秋

Love ~%C
(大正4年10月11日 井川恭宛)

(13) 叢桂花開落 画欄煙雨寒
琴書幽事足 睡起煮龍团

(大正4年12月3日 井川恭宛)

三期(1917年3月~1917年9月)

(14) 山閣安禪客 經牀世外心
空潭煙月出 处々聽春禽

(大正6年3月29日 松岡讓宛)

(15) 心静無炎暑 端居思渺然
水雲涼自得 窓下抱花眠

(大正6年8月15日 池崎忠孝宛)

(16) 即今空自覺 四十九年非
皓首吟秋霽 蒼天一鶴飛

(大正6年8月21日 菅虎雄宛)

(17) 即今空自覺 四十九年非
皓首吟秋霽 蒼天一鶴飛

(大正6年9月4日 井川恭宛)

(18) 心情無炎暑 端居思渺然
水雲涼自得 窓下抱花眠

(大正6年9月4日 井川恭宛)

病後書懷

(19) 潦倒三生夢 茫々百念灰
燈前長大息 病骨瘦於梅

(大正6年9月20日 久米正雄宛)

四期(1920年3月~1920年12月)

島秀才示於予香奩体和歌二首即戲答見贈

(20) 我鬼先生枯坐处 松風明月共蒼々

何知老魔窺禪室 一夜乍來脂粉香

(大正9年3月3日 小島政二郎宛)

偶成

(21) 簾外松花落 几前茶靄輕

明窓無一事 幽客午眠成

(大正9年3月16日 佐々木茂索)

偶成

(22) 簾外松花落 几前茶靄輕

明窓無一事 幽客午眠成

(大正9年3月16日 小島政二郎宛)

題空谷居士画竹

(23) 水辺幽石竹幾竿 細葉疎枝帶嫩寒

唯恐新秋明月夜 無端紙上露團々

(大正9年3月16日 小島政二郎宛)

(24) 簾外松花落 几前茶靄輕

明窓無一事 幽客午眠成

(大正9年3月17日 滝田樗陰)

古詩一首

(25) 寂兮舞雩路 垂柯与風蘆

顏兮恩顧士 黃雲呼鷗哉

(大正9年3月22日 小島政二郎宛)

春陰

(26) 似雨非晴幽意加 輕寒如水入窓紗
室中永昼香煙冷 簷角雲容簾影斜
靜處有詩三碗酒 閑時無夢一甌茶
春愁今日寄何處 古瓦樓頭數朶花

(大正9年3月22日 小島政二郎宛)

(27) 簾外松花落 几前茶靄輕
明窓無一事 幽客午眠成

(大正9年3月23日 池崎忠孝宛)

(28) 似雨非晴幽意加 輕寒如水入窓紗
室中永昼香煙冷 簷角雲容簾影斜
案有新詩三碗酒 牀無殘夢一甌茶
春愁今日寄何處 古瓦樓頭數朶花

(大正9年3月23日 池崎忠孝宛)

(29) 水辺幽石竹三竿 細葉疎枝帶嫩寒
唯怕清秋明月夜 無端紙上露團々

(大正9年3月23日 池崎忠孝宛)

(30) 茅簷帶雨燕泥新 苔砌無人花落頻
遙憶輕寒鳧水上 長隄楊柳幾條春

(大正9年3月31日 恒藤恭宛)

題空谷居士墨竹

(31) 水辺幽石竹三竿 細葉疎枝帶嫩寒
唯恐清秋明月夜 無端紙上露團々

(大正9年4月4日 下島勲宛)

(32) 簾外松花落 几前茶靄輕
明窓無一事 幽客午眠成

(大正9年4月11日 松岡讓宛)

(33) 窮巷壳文偏寂寞 寒厨欠酒自清修
拈毫窓外西風晚 欲写胸中落木秋

(大正9年5月15日 与謝野晶子宛)

(34) 窮巷壳文偏寂寞 寒厨欠酒自清修
拈毫窓外西風晚 欲写胸中落木秋

(大正9年6月3日 田中貢太郎宛)

偶成

(35) 瑟瑟侵階月 幽人帶醉看
知風露何處 欄外竹三竿

(大正9年9月10日 小島政二郎宛)

昨夜歸途得短韻

(36) 十載風流誤一生 愁腸難解酒杯傾
煙花城裡昏々雨 空對紅裙話旧盟

(大正9年9月16日 小島政二郎宛)

題倪先生隻鷄之図

(37) 明燭似風消慘悽 清香如水滌塵迷
展將一幅澄心紙 写得中秋白羽鷄

(大正9年12月6日 小穴隆一宛)

末期(1922年4月~1923年9月)二首

(38) 山徑誰相問 開窓山色青

山頭雲不見 山際一游亭

(大正11年4月24日 小穴隆一宛)

(39) 買酒窮途笑 誰吟歸去來

故園今泯々 廢巷暗蛩催

(大正12年9月21日 高橋竹迷宛)

三、芥川の漢詩について

以上にあげたものは三十九首あるけれども、まったく同じ内容のものと、ほとんど似ているものと、第(25)首のような単に言葉遊びであるものを除けば、芥川が実際に創った漢詩は、今のところ、二十六首しか見当たらない。

この二十六首のうち、七言絶句がもっとも多く、十三首あり、それから、五言絶句が十二首、七言律詩が一首という割合である。絶句が併せて二十五首もあり、律詩が一首しかないということは、長い律詩よりも、短い絶句のほうが短編作家の芥川の体質に合うからではないだろうか。

初期の四首のうち、第(1)首と第(2)首は内容がほとんど同じもので、友人に送る年賀状に書いたものである。二十六首の中で、年賀状に書くのがこの二首だけである。第(3)首と第(4)首は年の瀬に書かれたもので、やはり応答のものである。初期四首の共通のテーマは「梅の花」であり、場面設定は書斎で詩を推敲したり、陶淵明の詩を読んだりするものだ。芥川の漢詩と梅の花とのかかわりについて、前に触れたことがあり、ここでは略させてもらう。(注4)

第二期の九首のうち、第(8)首と第(10)首は同じ内容のもので、それぞれ井川恭と石田幹之助に送ったものである。第二期の漢詩では、梅の花の姿が第(7)首にしか残らなく、その代わり旅の郷愁が至る所に見られる。第二期の漢詩がすべて親友の井川恭に見てもらうために書かれたものと言っても過言ではない。初期の書斎での場面設定と打って変わって、第二期の漢詩は旅路の風景を詠じたものが多い。

第三期の(16)と(17)、(15)と(18)が重なっている。だから、第三期には四首しかない。送る対象が決まっているわけでないし、内容も初期、二期のものと違って、人生を思う述懐物が多い。

第四期には一八首のものが見つけられ、もっとも漢詩創作の意欲旺盛の時期である。第

四期の特色の一つとして、小島政二郎との艶体詩の贈答が多く見られること、例えば、(20)、(25)、(36) など。もうひとつの特色は、友人や自分のかいた画に賛をつける形で創った漢詩があり、例えば、(23)、(33)、(37) など。同じ漢詩を何人もの友人に送る傾向がこの時期でいちばん著しい。極端な場合、例えば (21)、(22)、(24)、(27)、(32) のように、同じ詩を五人にも送り、よほどその詩に気に入ったのであろう。詩の内容の場面設定について、また初期にもどり、書斎風景を描くようになった。

末期の漢詩は二首。第 (38) 首小穴隆一宛の漢詩は、句ごとに「山」という漢字が入り、いわゆる「嵌字格」のものである。

結び

芥川龍之介が書いた漢詩は、俳句などに比べ、決して多いというわけではない。ほとんどの作品が大正四年、大正六年、大正九年に集中して作られたものである。初期の漢詩は年末年始の挨拶を中心に書かれた習作的なものと見てよかろう。二期のものには、旅の時の郷愁が漂う作品が多く、見てもらう対象もほとんど親友の井川恭一人に限られる。三期のものは、数こそ多くないが、人生を述懐するものが初めて見られる。四期は量が多い割には、言葉遊びや贈答、画賛などが多く、それ以外のものは、初期のものに逆戻りの傾向が見られる。最後の末期には、二首しか書かなかった。大正十二年 9 月以降、書簡や現存資料には二度と芥川が創った漢詩を見かけたことがない。

注

1. 山敷和男 1996「所蔵の漢籍から何がわかるか」『国文学』第 41 巻 5 号 p81 学燈社
2. 「学問」は全 44 の章で構成された『追憶』(1926 年 4 月 1 日から 1927 年 2 月 1 日まで『文芸春秋』で連載)の第 20 章で、「幼稚園」「相撲」「宇治紫山」と同時に『文芸春秋』第 4 年第 8 号(1926 年 8 月 1 日)に掲載されたもの。
3. 1924 年 1 月 6 日発行の『サンデー毎日』第 3 年第 2 号に掲載
4. 彭春陽 1998「芥川龍之介の初期の漢詩一梅の花の世界一」(『淡江日本論叢』第 7 輯) 1998 年 3 月